解説

幕末明治の福井藩人材育成と海外渡航

熊澤恵里子

はじめに

福井藩における海外渡航は、一八六七年（慶応三）に二十三歳で渡米した後ラトガース大学で学び、病のため早世した日下部太郎（八木八十八）が最初である[1]。藩士子弟の履歴を収めた「子弟輩」（松平文庫）には一八七〇年三月に「洋行中之処於米利堅国養生不相叶病死之段、五月十四日申来候事、但弐拾六歳也」と、米国留学中に二十六歳の若さで病死した記述が残されている。当時の海外留学は日本からの長旅に加え、慣れない土地での衣食住と学問研究で、病に倒れる者も少なくなかった。幕末には日下部の他にも、佐々木権六、狛林之助らが海外渡航を行ったが、福井藩の人材が本格的に海外渡航を開始したのは、廃藩置県後といえよう。

福井藩は幕末維新期に藩政改革と連動した藩校改革を行い、近代的な文武学校を目指し軍事教育に必須となる理系の人材育成に力を入れた。安政年間に橋本左内が他国修行について、能力主義の徹底や依命・許可遊学の別など、厳格な選考による規則を構想している。維新後は藩政改革が促進され、学問・技術の修得が藩の就職に生かされる体制が実現したことで、他国修行熱が一層高まった。修行内容は藩校明新館中学生に規定された国漢洋（兵学含む）三学鼎立の「普通ノ学」の修得が奨励され、留学資金不足の場合は藩金館方の貸付を利用できた。「士族」「子弟輩」の分析によると、士分の者の約一五％が遊学を経験している[2]。この福井藩時代の他国修行の経験こそが、廃藩置県後に多くの人材を全国へ輩出する原動力となったのである。

本稿では、近代日本を支えた福井県人の幕末明治における海外渡航歴（留学・視察）に注目し、軍事系・理学系（数学物理系・化学系・生物系）・工学系・農学系・医学系の海外渡航者の履歴から、理系に強い福井の学問研究の系譜を辿るとともに、これまであまり取り上げられていない福井藩の人材にスポットを当てその活躍を紹介したい。

表１　幕末明治海外渡航者出身地別人数

県名	備考	県名	備考	県名	備考	県名	備考
北海道	18	東　京	624	滋　賀	47	香　川	26
青　森	37	神奈川	53	京　都	207	愛　媛	86
岩　手	41	山　梨	28	大　阪	76	高　知	109
宮　城	52	長　野	109	兵　庫	120	福　岡	120
秋　田	26	新　潟	99	奈　良	22	佐　賀	179
山　形	92	富　山	19	和歌山	67	長　崎	90
福　島	72	石　川	128	鳥　取	25	熊　本	92
茨　城	44	**福　井**	**105**	島　根	63	大　分	61
栃　木	44	岐　阜	64	岡　山	139	宮　崎	28
群　馬	64	静　岡	85	広　島	78	鹿児島	257
埼　玉	60	愛　知	110	山　口	298	計	4,351
千　葉	71	三　重	73	徳　島	43		

『幕末明治海外渡航者総覧』第３巻「出身地別索引」より作成

一、幕末明治の海外渡航

『幕末明治海外渡航者総覧』(3)にある「幕末明治海外渡航者出身地別人数」（**表１**）によると、幕末明治の全国海外渡航者総数四三四一名（延べ数）のうち、福井県の海外渡航者は一〇五名（今井巌・岩佐巌、佐々木長淳・権六、沼田一雄・勇次郎が同一人物のため、実際は一〇二名）である。この人数は、鹿児島・山口・高知・佐賀（薩長土肥）及び東京・京都の大都市には及ばないが、北陸の中では石川県と並び群を抜いている。海外渡航者とは短期・長期、留学・視察、公費＝官費・私費を含む。明治維新後の官費留学については、政権を握った鹿児島・山口両県の出身者が大部分を占めており、留学先並びに目的も多岐にわたった。留学といっても、見聞を広める、技術を習得するといった類のものも多く、修行年限からも卒業や学位取得を目的とした渡航は少数派であった。維新後まもなくの留学は、政府の財政難に加えて留学生の資質が問題視されたため、政府は一八七三年（明治六）に全ての官費留学生へ帰朝を命じた。初期官費留学生については、『文部省第一年報』（明治六年）に「方今各国在留ノ生徒ヲ調査スルニ全員三百七十三人ニシテ官費生二百五十人ナリ」、「其資金各差異アリト雖モ概スルニ一年ノ学資金二十五万円ニ及フ」とあり、綿密な計画なしに膨大な資金がつぎ込まれたことが判明している。「貸費留学生規則」を整え、「学力優等品行正シク身体健ニシテ海外ニ留学セン事ヲ望ムト雖モ学資等自弁スル事能ハサル輩」を対象とした「文部省所轄海外留学生」派遣が開始されたのは、七五年のことであった。給貸額は年間一人一〇〇〇円で、派遣年齢は凡そ十七歳以上二十二歳以下とされた。

再開後の第一回「海外留学生」には東京開成学校生徒一一名が選抜された。内訳は米国九名（法学四、化学三、工学二）、仏国一名（諸芸学）、独国一名（鉱山学）で、福井藩出身南部球吾はコロンビア大学鉱山学校へ、武生出身斎藤修一郎はボストン大学法学校へ入学した。一八七六年の第二回「海外留学生」は、英国八名（法学三、化学二、工学三）、仏国二名（物理学）が派遣された。『文部省第五年報』（明治十年）によると「海外留学生」は総計一九名で、二名が病気により帰国している。南部は七八年六月に「諸鉱工士」を取得後、ペンシルバニア州製銅会社の技師

となり鉄鎔鉱炉の新築設計に従事し、斎藤は「法律得業士」を取得後裁判所で実地研修を開始している。一八七九年には新たに東京大学法理文学部及び医学部卒業生から抜擢を行い、英国三名（英国法律・経済学、化学、水道建築・衛生工学）、仏国一名（高等数学・天文学）、独国三名（産科学、病理論・病体組織学、眼科）が派遣された。『文部省第十年報』（明治十五年）には現在留学中人数として、英国三名、独国一一名、仏国・墺国各二名とあり、東京大学におけるドイツ学問への傾倒が見て取れる。

二、福井藩の人材育成と海外渡航

「幕末明治海外渡航者」の「渡航目的」（表２）は、医学系・工学系・理学系の修得が圧倒的である。医学系に関しては、幕末から長崎・江戸・大坂の他、佐倉藩佐藤泰然の私塾順天堂で数多く学んでおり、その延長線上に海外での高度な医療技術の習得があったと考えられる。理学系は幕末の軍事教育、軍事技術の基礎であり、他分野に応用できる化学が中心であった。

「渡航先」（表３）は医学・工学・化学の渡航先であるドイツが一番多い。これは、政府がドイツ型国家の形成を目指し急激にドイツ法制度及び学問研究の導入へ傾倒していったという政治的背景があろう。福井藩では政府がドイツに注目する以前に、一八六九年（明治二）から七〇年に大学長官（別当）を務めた松平慶永がドイツの教育制度に関心を示している。慶永はドイツの軍事力に注目し、それを支える国家の産業と教育と国民皆兵を可能にした国家体制に関心を寄せたのである。

医学については、慶永長官時代に大学東校（医学所）へのドイツ人教師招聘を決定し、その体制が廃藩置県後も維持された。

「幕末明治海外渡航者」のうち、藩校世代は概ね明治十年代までの渡航者である。明治十年代後半から二十年代に入ると、近代学校教育の洗礼を受けた世代が渡航の中心となる。共通点は、いずれも留学・視察後の就職先や社会的地位が留学以前に比べ上昇している点である。しかし帰国後すべてが官職に就けた訳ではない。前述の第一回文部省所轄海外留学生南部球吾は、

表２　幕末明治海外渡航者渡航目的

目的	延べ人数	
	全国	福井
全般・外交交渉	225	3
軍事	586	6
法律	386	6
財政・金融	197	0
経済	370	6
人文系	604	13
芸術	108	2
理学系（数物系）	58	2
理学系（化学系）	164	8
理学系（生物系）	52	1
工学系	680	21
農学系	190	3
医学系	787	26
宗教関係	167	5
その他	－	2
不明	－	2
計	4,574	106

『幕末明治海外渡航者総覧』第３巻「渡航目的別索引」より作成

表３　幕末明治海外渡航者（福井）渡航先

渡航先	延べ人数
ドイツ	47
アメリカ	39
イギリス	22
フランス	13
オーストリア	13
イタリア	4
ベルギー	3
スイス	3
インド	3
清	3
オランダ	1
ロシア	1
ヨーロッパ	4

『幕末明治海外渡航者総覧』第３巻「渡航目的別索引」より作成

一八八〇年に期待を胸に帰国したが官職がなく、翌年意を決して三菱会社の招聘に応じている。

三、福井藩時代の海外渡航

日下部太郎の米国留学に次いで福井藩から派遣されたのは、「工学系」修行を目的とした佐々木権六（長淳）と狛林之助である。二〇〇石取の佐々木は砲兵術修行から弾薬製造、蒸気船航海術に秀で一八六七年（慶応三）に米国へ留学した。「士族」には「四月八日江戸ゟ横浜江罷越、夫ゟ廿二三日頃アメリカへ出帆、辰正月十日江戸表ゟ帰」とある。帰国後蒸気船運用、大砲製造などに成果を上げ、七一年に化学所の責任者となったが、同年十月七日には工部省へ出仕した。その後勧業局に勤務し養蚕・紡績研究のため再度海外渡航を行った(4)。一方、狛も佐々木と同様に蒸気船運用に携わり、一八六八年秋に英国ロンドンへ留学した。七〇年七月には外務省が「彼地専出精勤学ノ旨相聞候ニ付往々相応ノ御用ニモ可相立モノニ可有之」と弁官に掛け合い、「今一両年ノ間勤学」のために年一五〇ポンドの学資支給が許可されている。狛は帰国後工部省出仕となった。一年間一五〇ポンドは、当時一ポンド一〇円換算で約一五〇〇円となる。ちなみに、一八九〇年に国費留学した夏目漱石は年一八〇〇円支給されたが、生活は苦しかったという。

今井巌（岩佐巌）は「子弟輩」によると藩医岩佐家の出身で、長崎で医術修行後、一八七〇年に独国へ渡航しフライブルク鉱山大学で学んだ。後述する山脇玄も駐独公使青木周蔵の勧めで医学から法律学へ転じており、政府が富国強兵・殖産興業を目指して、早急な人材育成を企図していたことがわかる。

四、渡航期間中のリスク

一八七一年（明治四）、英国海軍修行生の八田裕次郎とともに海軍修行を予定していた上坂多賀之助の留学先が米国へ変更された。「士族」によれば、上坂は二〇石五人扶持。一八六二年（文久二）航海術修行に始まり、維新後数学寮教授方を務め、六九年に海軍操練所修行生となった。「士族」に「一同（明治）四未二月廿二日今般為海軍修行英国江被指遣候事、廿六日拝命、但出帆日

限且委細之儀ハ追而可相達事」「一明治六子一月病死　病気ニ付帰」とあり、病により二十三歳で死亡した。後日上坂の場合は、海外での膨大な治療費に加え、ニューヨークからサンフランシスコ迄の看病付添人山岡次郎[5]の往復旅費、出発時の「拝借金」五〇円等、総計五〇円と米金一一六〇ドル四セントの返納について、「同人父兄共ヨリ弁償為致可申哉又ハ特殊之御詮議ヲ以テ該費ハ都テ現費ト同視シ此際本払ニ相立可申哉」と、一八七七年六月に海軍大輔代理へ会計局副長から「留学生病死之者諸費決算之義ニ付伺」が出されている。幸い本件は後者扱いで処理されたが、留学中病気で倒れた場合、治療費に加え学資金の返納などが発生し、親族の負担は大きかった。英米国海軍省留学生のうち、上坂を含む四名が病気で帰国後死亡し、上記の諸経費決算が行われている。

五、医者からの転身―今井巌と山脇玄

海外渡航者のなかには、家業でもある医術修行が目的であったにもかかわらず、修行替えした異色な経歴を持つ留学生もいる。フライブルク鉱山大学へ入学した今井巌とハイデルベルク大学で法学を学んだ山脇玄である。

「子弟輩」によると、今井巌は「岩佐玄珪弟　明治三午十九歳」。岩佐玄珪は高一〇〇石の藩医で、佐倉の順天堂や長崎のポンペイに学び、維新後は太政官雇いとなった人物である。玄珪の弟の今井巌は、一八六六年（慶応二）から長崎で医術修行を命じられ、一旦帰国後「（明治元）十二月十六日医術為修行長崎表江罷越候様被仰付、但修行中一日金壱歩ツ、被下置候」「同二巳九月十四日長崎県修行之処、追々進業ニ付一ケ年五十両被下候事」とあり、医師として優秀な人材であることがうかがえる。今井が鉱山大学へ入学した経緯は定かではないが、駐独公使青木周蔵の助言があったことは容易に想像できる。青木は独国留学生について、「其の大部分は医学修業者に非ざれば則ち兵学研究者なり。然れども、一国の文明は単に医学若くは兵学の研究のみに依て増進するものにあらざるが故に、予は幾多の留学生をして、各其の長所若くは嗜好に従ひ、或は政治、経済の学を修め、或は各種の工業を実際的研究せしむるは、寧ろ国家が広く知識を世界に

求め国運の隆興を計らんとして多数の留学生を海外に派遣するの主旨に副ふ」と述べている。また、医学修行の山脇玄について、「大学東校より派遣せられし留学生中、山脇〔玄〕氏は其の長崎医学校〔前長崎精得館〕に在りし時より予の知る所にして、蘭学を能くし、且、気骨あり…文学の才に富めるを以て、政治学を研究せんことを勧告」したと記している（『青木周蔵自伝』）。山脇玄の経歴は「子弟輩」に記載された以下の通りである。親は一五〇石取の藩医山脇立樹である。

山脇玄（玄寿・元寿）立樹倅　明治三午廿三歳

一慶応元丑十二月十六日除痘館当番皆勤、其上番外数度出勤ニ付御褒詞

一同二寅七月廿二日医術為修行長崎表江罷越候様被仰付、同廿五日出立

一明治元辰十二月朔日当夏越後表出兵ニ付、修行詰之面々一旦致帰国候様被仰出候得共、御都合も出来ニ付其儘滞埼致修行候様被仰付

一同二巳七月廿七日玄寿事玄卜改、後又元寿、又玄

一同年九月十四日長崎県修行之処追々進業ニ付一ケ年百両、別段被下候事

一同三午三月八日今般於長崎表左之通被仰付、被任大学少助教

一同年四月十日長崎県ゟ着、五月三日引返シ同所へ出立

一同年十一月　為留学普国へ指遣候事

山脇は長崎での医術修行を経て大学少助教に任ぜられ、一八六九年に独国留学が決定した。翌年に渡独し、前出の青木周蔵の勧告により修行目的を変更したのである。七五年八月、司法卿大木喬任から太政大臣三条実美に宛て「独国在留山脇玄儀ニ付伺」（国立公文書館所蔵）が出されている。山脇について「元来法律学篤志之者ニ有之追々勉励学業モ抜群進歩往々一廉ノ御用ニ可相立見込ニ有之候」と高く評価し、「当省御用為取調向三ケ年之間同国在留被仰付為費用一ケ年一千円宛ヲ賜リ候様致度」と願い出、文部省の海外留学生と同額の学資金を獲得するに至った。この学資金獲得には、やはり青木周蔵の尽力があった。すなわち大木喬任宛青木公使書簡に、「昨年文部省改革ノ際自他留学生徒一般往往学資不被差立候段布令有之候ニ付爾来無拠費私財今以当国「ハイデルベルヒ」府大学校ニ而執心之法律学科修業罷在候」と、まず文部省による留学生へ

の帰朝命令に対し、私財を売り払ってでも学問研究の継続を強く望んでいることを述べ、司法のためにも山脇の学問研究への学資金支給を依頼した。また、「実ハ先前留学生徒中法律科江従事致シ候者モ有之候得共学業総而半途ニ而致帰国右山脇程ニ致進歩候者ハ一名モ無之様被存候」と青木は山脇の有能さをアピールしている。山脇は帰国後の一八七七年には「月俸百円ヲ以テ当省御用掛リ申付奏任官ニ準シ取扱候様致度」と、司法省で雇用された。山脇はドイツの法制度や軍事関連書籍の翻訳に留まらず、自らも司法から家政迄数多くの著書を残している。「女子の労働」や「家政の改良」の著述もあり、理系・文系を兼ね備えた近代の教養人といえよう。

結びにかえて

幕末明治の福井藩は理系の人材を数多く全国へ輩出した。その原動力となったのは藩校教育と海外渡航による近代的な学問・技術の修得であった。明治初期の渡航目的が工学系・化学系等理系であったことは、その後の福井の殖産興業と強く結びついている。また、医学修行から転じた山脇玄のように法律・経済・女子教育等にも長けた教養人が生まれたのも福井藩の特色である。福井県文書館の翻刻資料・画像を活用して、海外渡航者と同時代体験を試みてはどうだろうか。

註

(1)高木不二「黎明期の日本人米国留学生―日下部太郎をめぐって」大妻女子大学編『大妻女子大学紀要 文系』二〇〇五年。

(2)熊澤恵里子『幕末維新期における教育の近代化に関する研究―近代学校の生成過程―』（風間書房、二〇〇七年）。

(3)海外渡航者のデータとして、手塚晃・国立教育会館編『幕末明治海外渡航者総覧』（柏書房、一九九二年）を使用した。幕末明治の海外留学に関しては渡辺実、石附実らによる研究、各種事典があるが、『総覧』はこれら研究業績及び各種データ資料を網羅している。ただし、廃藩置県後に他地域へ移住した者、例えば白井光太郎は親は福井藩士だが、出身地は東京と分類されているため、本稿では取り扱っていない。今後の追加検討が必要である。

(4)長野栄俊「佐々木権六（長淳）に関する履歴・伝記史料の紹介」（『若越郷土研究』五二巻二号、二〇〇七年）。

(5)柳沢芙美子「山岡次郎研究ノート（1）―織物産地を繋いだ染色技術者―」（『福井県文書館研究紀要』第二号、二〇〇五年）。

	氏　名	渡航先	渡航時期	渡航形態／留学教育機関／専攻分野	出身校	渡航時所属機関	帰国後
15	山　形　仲　芸	独	1897 ～ 1899	公費留学／外科学	東京大学医学部	文部省	仙台医学専門学校長
16	佐　藤　達次郎	墺独	1897 ～ 1900 1903 ～ 1904	私費留学／ウィーン大学、ベルリン大学／外科学	帝国大学医科大学	その他の機関	順天堂副院長
17	舟　岡　英之助	独	1901 ～ 1904	公費留学／ウユルツブルク大学／生理学	帝国大学医科大学	文部省	第三高等学校教授
18	奈　良　愛三郎	独	1904 ～ 1905	私費留学／ロストック大学／眼科学	第一高等学校医学部	自主渡航	福井に開業
19	高　田　　寿	独	1906 ～ 1908	私費留学／ベルリン大学、ボン大学／外科学	帝国大学医科大学	自主渡航	開業医
20	牧　田　　太	独	1907 ～ 1909	公費留学	東京帝国大学医科大学	陸軍省	陸軍二等軍医正
21	加　藤　　寛	独	1907 ～ 1910	私費留学／グライフスワルド大学／内科学	金沢医学専門学校	自主渡航	京都帝国大学医科大学で研究
22	河　合　　鷹	独スイス	1909 ～ 1911	私費留学／ミュンヘン大学、ベルン大学／産婦人科学	第四高等学校医学部	自主渡航	土屋病院長（福井県鯖江市）
23	難　波　　要	独墺	1909 ～ 1911	私費留学／マールベルク大学、プラーグ大学／外科学	東京帝国大学医科大学	自主渡航	私立野毛山病院長
24	石　森　国　臣	独	1910 ～ 1912	公費留学／ストラスブルグ大学／生理学・医化学	第四高等学校医学部	地方公共機関	愛知県立医学専門学校教授
25	軽　部　修　白	米	1910 ～ 1913	私費留学／ジョンス・ポプキンス大学	金沢医学専門学校	自主渡航	福井県立病院医師
26	秦　　勉　造	独墺	1912 ～ 1914	私費留学／ベルリン大学、プラーグ大学	東京帝国大学医科大学	自主渡航	札幌病院長

軍事

1	八　田　裕次郎	英仏	1871 ～ 1881 1884 ～ 1890	公費留学・公費個人視察／英仏公使館付	海軍兵学寮	海軍省	
2	上　坂　多賀之介	米	1871 ～ 1872	公費留学／軍事	海軍兵学寮	海軍省	
3	花　島　半一郎	仏	1883 ～ 1888	公費留学／軍事（馬術）	陸軍士官学校	陸軍省	陸軍騎兵中尉兼乗馬学校教官
4	加　藤　寛　治	露	1899 ～ 1902	公費留学／海軍軍備	攻玉社・海軍兵学校・海軍大学校	海軍省	海軍大尉
5	名　和　又八郎	英	1900 ～ 1901	公費団体視察／軍事（軍艦回航）	海軍兵学校	海軍省	
6	松　井　　命	仏	1910 ～ 1914	公費個人視察／軍事	陸軍士官学校	陸軍省	陸軍砲工学校教官

理学系（生物）

1	服　部　他之助	米	1884 ～ 1889	私費留学／アバシュ大学／植物学	同志社	自主渡航	水産講習所講師、技師

農学系

1	佐々木　長　淳 （権六）	米墺伊	1867 ～ 1868 ·1873·1876	公費留学・公費団体視察／ウィーン万博／伊養蚕公会所／養蚕・紡績		福井藩、工部省、内務省	内務省勧業寮出仕
2	青　山　　元	欧州	1900	公費個人視察	駒場農学校	農商務省	農事試験場技師
3	奥　村　順四郎	仏英独	1901 ～ 1904	公費留学／醸造学	帝国大学農科大学	文部省	東京高等工業学校教授

理学系（数学物理系）

1	大　森　房　吉	独伊	1894 ～ 1897	公費留学／地震学	帝国大学理科大学	文部省	東京帝国大学理科大学教授
2	中　村　清　二	独	1903 ～ 1906	公費留学／ゲッチンゲン大学／結晶学及び光学	帝国大学理科大学物理学科	文部省	東京帝国大学理科大学教授

『幕末明治海外渡航者総覧』第１巻・第２巻より作成

※松平康荘は私費留学（1889 ～ 1892）で英国サイレンセスター王立農学校に学んでいるが、『総覧』の「渡航目的」では「人文系」に分類されているため、本「農学系」リストにも掲載しなかった。

表 4 幕末明治海外渡航者（福井）リスト

工学系

	氏　名	渡航先	渡航時期	渡航形態／留学教育機関／専攻分野	出身校	渡航時所属機関	帰国後
1	佐々木　長　淳（権六）	米墺伊	1867 ～ 1868 ·1873·1876	公費留学・公費団体視察／ウィーン万博／伊養蚕公会所／養蚕・紡績		福井藩、工部省、内務省	内務省勧業寮出仕
2	狛　　林之助	英	1868 ～ 1873	公費留学		福井藩、文部省	工部省鉱山寮六等出仕
3	瓜　生　　震	米英	1871 ～ 1874	公費団体視察／ユニバーシティ・カレッジ		工部省	工部省鉄道寮出仕
4	長谷部　仲　彦	仏	1872 ～ 1874	公費留学／鉱山学		開拓使	
5	竹　内　　毅	墺	1873 ～ 1874	公費団体視察／ウィーン万博／巻烟草製法		大蔵省	大蔵出納少属
6	和　田　維四郎	独	1884 ～ 1885	公費留学／鉱物学	東京開成学校	農商務省	東京大学教授
7	畠　中　友　治	米	1885	私費留学／車輪鋳造法		自主渡航	
8	阿　部　正　義	独	1885 ～ 1889 1893 ～ 1898	私費留学・公費留学／ハイデルベルク大学／地質岩石学	工部大学校鉱山科	自主渡航 農商務省	農商務省技師
9	横　井　左　久	仏	1886 ～ 1889	公費留学／造船学	東京大学理学部機械工学科	海軍省	
10	吉　川　喜　作	米英	1886 ～ 1895	私費留学／機械捺染伝習	千住製絨所染色部伝習生	自主渡航	堀川新三郎の工場に勤務
11	南　部　常次郎	米	1887 ～ 1889	私費留学／コーネル大学大学院／土木工学	帝国大学工科大学土木学科	自主渡航	宮城県雇
12	山　田　文太郎	独	1889 ～ 1891	私費留学／フライブルク鉱山大学／採鉱冶金学研究	帝国大学工科大学採鉱冶金学科	自主渡航	宮内省御料局技師
13	近　藤　　茂	英米独スイス	1901 ～ 1903 1908 ～ 1909	公費留学・公費個人視察／電気事業研究	東京帝国大学工科大学電気工学科	逓信省	逓信技師
14	大　村　卓　一	米欧	1902 ～ 1903	私費個人視察／鉄道事情	札幌農学校工学科	企業	北炭保線掛長
15	日　比　忠　彦	独仏	1902 ～ 1904	公費留学／土木工学	東京帝国大学工科大学土木工学科	文部省	京都帝国大学理工科大学助教授
16	斎　藤　　真	英	1902 ～ 1905	公費留学／機械工学	東京帝国大学工科大学機械工学科	海軍省	
17	持　田　軍十郎	スイス墺	1903 ～ 1905	公費留学／森林土木学・砂防工事研究	帝国大学工科大学土木学科	農商務省	農商務省山林局技師
18	五十嵐　次之助	米	1906 ～ 1914	私費留学／コロンビア大学／建築学	東京高等工業学校付属教員養成所	自主渡航	清水組入社
19	大　沢　次三郎	英	1909	私費留学	東京帝国大学工科大学機械工学科	企業	南満州鉄道会社沙河口工場倉庫課長
20	伴　　宜	欧	1911	公費個人視察	東京帝国大学工科大学土木工学科	陸軍省	陸軍技師
21	河　合　定　二	英	1911 ～ 1914	公費留学／グリニッジ海軍大学校 / 造船学	東京帝国大学工科大学造船学科	海軍省	海軍造船少監艦政本部出仕

理学系（化学）

1	今　井　　巌（岩　佐　　巌）	独	1870 ～ 1877	公費留学／フライブルク鉱山大学	大学東校	文部省	
2	山　岡　次　郎	米	1871 ～ 1876	公費留学(福井県より派遣)／理化学		地方公共機関	東京大学理学部教授補
3	今　立　吐　酔	米	1874 ～ 1879	私費留学／ペンシルバニア大学	明新館	自主渡航	京都府中学理化学教授
4	南　部　球　吾	米	1875 ～ 1880	公費留学／コロンビア大学鉱山学科／鉱山学	東京開成学校	文部省	三菱会社入社
5	松　平　忠太郎	英独	1884	私費留学／造幣	工部大学校化学科	大蔵省	
6	疋　田　桂太郎	米	1906 ～ 1908	公費留学／塗料製造、応用化学	工業教員養成所応用化学科	文部省	東京高等工業学校教授
7	松　本　　均	独英米	1910 ～ 1913	公費留学／製造化学	東京帝国大学理科大学化学科	文部省	京都帝国大学理工科大学教授
8	清　水　与三郎	独米	1911 ～ 1913	公費留学／化学及び理科学教授法	東京帝国大学理科大学化学科	文部省	奈良女子高等師範学校教授

医学系

1	山　脇　　玄	独	1870 ～ 1877 1880 ～ 1881	公費留学、公費団体視察／ハイデルベルク大学、ベルリン大学／解剖学、法律学		文部省、司法省、太政官	太政官権少書記官
2	橋　本　綱　常	独墺伊	1872 ～ 1877 1884 ～ 1885	公費留学、公費団体視察／ベルリン大学、ウィーン大学／内科学、外科学	長崎精得館	陸軍省	陸軍軍医
3	岩　佐　　純	独墺	1884 ～ 1885	私費留学	長崎精得館	自主渡航	宮内省一等侍医
4	橋　本　長　勝	墺独	1884 ～ 1890	私費留学／ベルリン大学		自主渡航	
5	岩　佐　　新	独	1884 ～ 1895	私費留学／ミュンヘン大学		自主渡航	
6	岩　佐　登彌太	独墺	1884 ～ 1888	私費留学／ハイデルベルク大学、ベルリン大学、ウィーン大学／外科学	東京大学医学部	自主渡航	宮内省侍医
7	高　島　多米治	米	1885 ～ 1901	私費留学／メリーランド大学／歯科学		自主渡航	東京で開業
8	戸　祭　文　造	英	1890 ～ 1891	公費留学／海軍軍陣衛生	帝国大学医科大学	海軍省	海軍少軍医
9	土　肥　慶　蔵	独墺	1893 ～ 1898	私費留学・公費留学／ハイデルベルク大学、ウィーン大学／皮膚病学、黴毒学	帝国大学医科大学	自主渡航 文部省	東京帝国大学医科大学教授
10	今　井　真　吉	独	1897 ～ 1899	公費留学／眼科学	帝国大学医科大学	地方公共機関	大阪医学校教諭
11	木　下　正　中	独	1897 ～ 1899	私費留学／産婦人科学	帝国大学医科大学	自主渡航	大阪府立医学専門学校医科婦人科長
12	木　村　孝　蔵	独	1897 ～ 1899	公費留学／フライブルク大学／外科学	東京大学医学部	文部省	第四高等学校教授
13	平　井　政　適	独	1897 ～ 1899	公費留学／軍事衛生業務研究	帝国大学医科大学	陸軍省	東京第一病院長
14	田　代　　正	独	1897 ～ 1899	公費留学／外科学	東京大学医学部	文部省	長崎医学専門学校長兼長崎病院長

参考資料

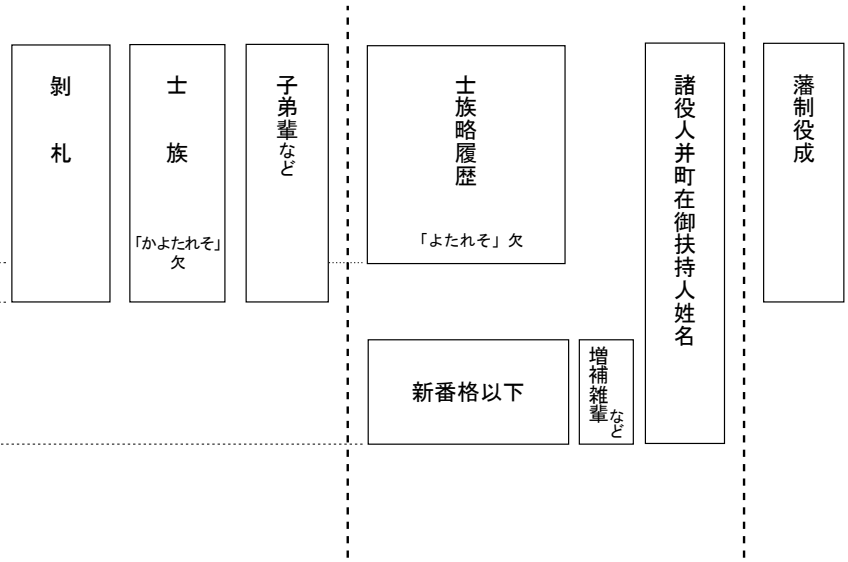
各資料と家格などとの関係

福井藩家臣団の家格別人数

（嘉永５年）

家　　格	人　数
本多家	1
高知席	16
高　家	2
寄合席	38
定座番外席	14
番士（役番外	106
番士（大番など	495
新番・新番格	81
医師・絵師など	49
士分合計	802
与力	39
小役人	84
一統目見席	87
小算・坊主・下代	347
諸組（足軽）	1,341
卒合計	1,898
家臣団総計	2,700

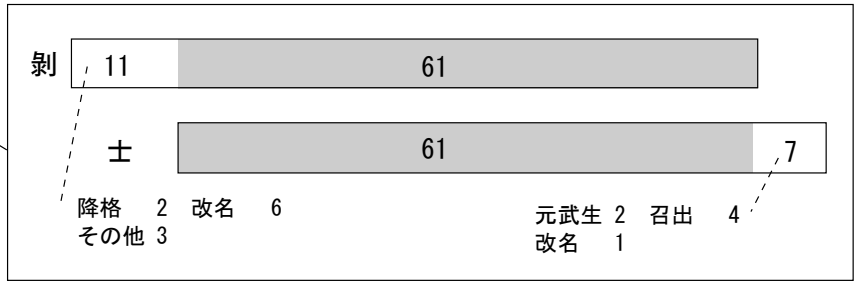
・荒子・中間等の小者973人を除く
・舟沢茂樹氏「福井藩家臣団と藩士の昇進」
『福井県地域史研究』創刊号 1970年による

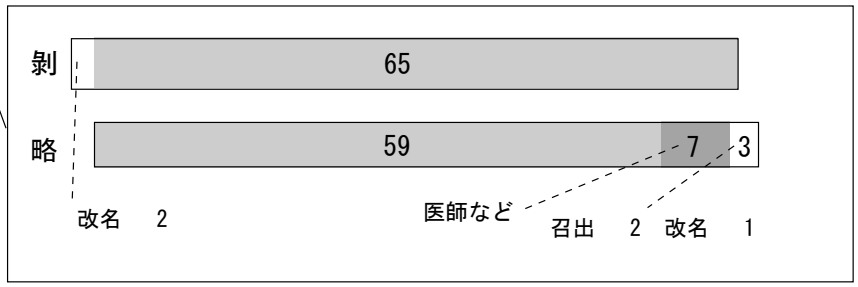


剝札と士族・士族略履歴との連繋（い・かを例に）

資料別家数・人数

	剝	士	略	藩
あ	46	47	41	51
い	72	68	62	69
う	13	14	11	14
え	8	7	6	7
お	68	77	65	81
か	68	欠	59	72
き	12	9	7	10
く	21	25	18	22
け	2	2	2	3
こ	21	22	20	28
さ	46	45	41	48
し	19	18	18	20
す	23	26	26	28
せ	10	10	7	9
そ	1	欠	欠	2
た	68	欠	欠	70
ち	2	2	6	2
つ	25	23	17	25
て	2	3	3	3
と	14	19	11	15
な	50	52	41	55
に	17	15	15	16
ね	1	1	1	2
の	12	11	10	11
は	40	46	37	44
ひ	26	23	20	17
ふ	10	9	9	11
ほ	24	26	22	34
ま	36	43	32	42
み	29	36	23	27
む	9	10	7	12
め	1	1	1	1
も	8	7	5	8
や	43	50	41	53
ゆ	2	1	2	2
よ	22	欠	欠	29
わ	10	15	8	11





・「剝札」「士族」は一連の資料で、幕末維新期の福井藩家臣団（士分以上）の人事記録としてはもっとも充実している。
・「士族」の第３冊（かよたれそ）が欠本、「（士族略履歴）」「藩制役成」で補完が必要。
・「剝札」と「士族」「（士族略履歴）」は、ほぼ連繋する。「剝札」では改名や卒への降格、「士族」「（士族略履歴）」では子弟の新規召出（戊辰戦争など）、武生家臣などの新規繰入（明治３年２月）などが不連繋の原因。
・資料別家数・人数の「あ」～「く」は確定値。「け」以下は筆耕原稿などによる概数。